AMDA
多様性の共存
ジャーナル

2023 年 4 月 25 日　VOL.46　第 305 号　定価 550 円
発行／ AMDA　〒 700-0013　岡山市北区伊福町 3-31-1
TEL 086-252-7700　FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp
郵便振替：01250-2-40709　口座名：特定非営利活動法人アムダ

2023 年
春 号
春

救える命があればどこまでも

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第 36 回
元台湾医師会会長　吳運東（Yung Tung WU）先生

特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
https://amda.or.jp/
特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
https://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
https://www.amdamedicalcenter.com/
AMDA 兵庫　http://amda-hyogo.com/

AMDA を支えてくださっている方々の様々なエピソードをインタビュー形式でお届けします。今回は、台湾と AMDA の関係を長年に渡って繋いでいただいている吳運東先生（以下、WU 先生）をご紹介いたします。

（聞き手：AMDA 理事　難波　妙）

AMDA　WU 先生はとても日本語を上手にお話しになりますね。

WU　私は 1938 年生まれです。もう 85 歳になります。私が小学校に入ったころ、台湾はまだ日本の統治下にありましたので、最初に日本の教育を受けました。しかし、小学校 2 年生の終わりごろから中国の教育を受けることになりました。当時、日本語で話すことは禁じられていましたが、その後、大学の医学部に進み、より高度な勉強をするために、東京で内科医をしていた叔父から、日本語の医学書を送ってもらいました。つまり、日本語で医学を学んだのです。1970 年、私は半年間日本の結核研究所で研究を進め、論文を書き、東邦大学で博士号を取得しました。当時、日本人の看護師さんと文通もしましたよ。日本語で一生懸命手紙を書きました。今、その方が何処にいらっしゃるかはわかりませんが、これもとても良い思い出です。

AMDA　その後アメリカで研鑽を積まれましたね。

WU　1980 年から 9 年間、さらにアメリカで学びました。帰国した 1990 年に台湾医師会から台湾の桃園市の医師会会長の話があり、3 年間務めました。その後は、台湾医師会会長を 6 年間務めました。

AMDA　WU 先生のご人脈の広さにいつも感心させられます。

WU　私は世界医師会をはじめ、国内外の医師会関連の活動に多く参加しました。自ら出向いて沢山の人たちと直接会い、様々な問題を提起し、解決することが大切だと思ったからです。台湾でも多くの会議を主催し、世界各国の医師会関係者を招聘しました。日本の会議では、二次会のカラオケで、日本人医師がいつも歌っていた「昴」を今でもよく思い出します。私は、このような人と人との心のふれあいが何より楽しくて大好きです。これまでのご縁は様々な形で今も続いています。

AMDA　WU 先生のご尽力により、AMDA は台湾保健省の国際活動部門『台湾 IHA』（Taiwan International Health Action）と 2009 年に協力協定を締結しました。これまで、インドネシア、スリランカ、トルコ、インドで、白内障手術、口唇口蓋裂手術等、8 回の医療技術支援をともに行ってきました。またネパールの AMDA ダマック病院では、内視鏡の提供も受けています。台湾の国際貢献は WU 先生のご貢献から始まったと聞いています。

WU　2000 年当時の陳水扁総統は、台湾の国際貢献にとても力を入れていました。当時、私は、より外交と医療を重視した国際関係構築のために、台湾の保健省と外務省が協力して国際貢献を進めるべきだと考えました。そこで、双方の省から担当者を出すことを提案し、緊急救援活動や研修等を通じた海外人財育成を進めてきました。これが台湾 IHA の出発点となり、今や、2 月のトルコ大地震の際には、発災から 20 時間で救援チームを現地に派遣するようになりました。台湾の国際貢献は、南アメリカ、東南アジア、オセアニアへと広がっています。このような過程で知り合った AMDA の菅波理事長のことは弟のように思っています。

AMDA　最後に AMDA への期待をお聞かせください。

WU　台湾 IHA は政府の国際貢献部門です。そして AMDA は、世界に支部を持つ国連認定の NGO です。それぞれの強みとネットワークを活かせば、より幅広く効果的に世界の平和に貢献できると思います。平和を築く第一歩は、人と人とのつながりから始まります。その一歩の大切さを私たちは決して忘れてはいけません。

4年ぶりにネパールAMDAダマック病院で内視鏡研修を再開

AMDAネパール支部が運営するAMDAダマック病院は、ネパール東部にあるジャーパ郡ダマック市にあります。2018年と2019年に、佐藤拓史医師（AMDA理事）が同病院で上部内視鏡研修を行いました。その後、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2021年はオンラインでの研修となりました。今年は、4年ぶりに現地での研修を3月7日から13日まで実施。ダマック病院で内視鏡を担当するディワス医師（2016年に約2ヶ月半、岡山済生会総合病院での研修を終了）をはじめとする地元医師たちに、麻酔を使用しない下部消化管内視鏡の研修を行いました。

佐藤医師の指導の下、全大腸内視鏡19人、上部内視鏡13人の患者の検査・治療を行うことができました。直腸癌、上行結腸癌、S状結腸捻転、クローン病、ポリープなどの病気が見つかりました。

ネパールでは首都カトマンズ以外の地方で、まだ大腸内視鏡検査は普及していません。地方の病院での内視鏡検査・治療を地元の医師自らができるようになることで、その地域の沢山の命が救われることになります。とても重要な意義深い研修であると実感しました。今回はダマック周辺だけでなく、他の地域からも患者さんが来られ、大腸カメラによる診断と治療を受けました。「今まで受けた内視鏡検査に比べて全然苦しくなくてよかった」と患者さんからの声も聞かれました。S状結腸捻転の患者さんは腹部の痛みを訴えていましたが、大腸カメラの治療を受けて痛みがなくなり、嬉しさのあまり、涙を流していました。

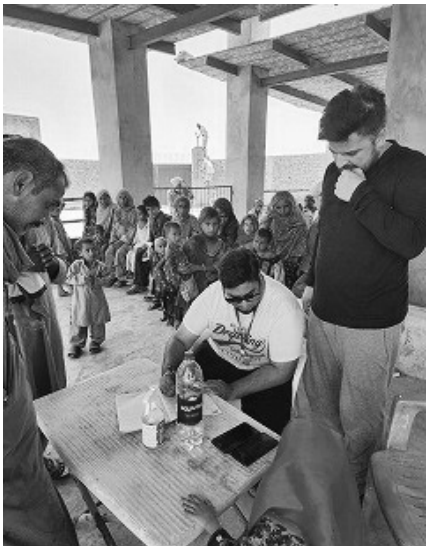
（ネパール事業担当 アルチャナ シュレスタ ジョシ）

インド・ブッダガヤでの食事支援

AMDAは2009年からインド・ビハール州ブッダガヤの『AMDAピースクリニック』（APC）で母子保健事業を実施しています。ビハール州はインドでも最貧州として知られており、AMDAは、2023年1月からブッダガヤ周辺に住む貧しい人々を対象に食事支援を行っています。

毎週火曜日のお昼に行っている食事支援には毎回120人以上の人々が集まり、クリニックの前に用意された長い座布団に座り、受け取った食事を食べています。3歳から7歳くらいの子どもも大勢集まり、皆、美味しそうに食べます。村人は外部の人と話をすることに慣れていませんが、大変喜んだ様子で一言、「美味しかった」と、満足そうな笑顔を見せていました。（インド事業担当 アルチャナ シュレスタ ジョシ）

パキスタン洪水被災者支援活動



2022年後半にパキスタンで発生した大規模な洪水に対応するため、AMDAでは昨年9月に現地へと調整員を派遣。パキスタン国内の協力団体と連携して緊急支援活動を行いました。国土の三分の一が浸水した今回の災害では、水が引くまでに数ヶ月を要する結果となりました。

活動を引き継いだ現地協力団体の一つ『バカイ財団』は、10月からシンド州モロ（Moro）、タッタ（Thatta）、カロ（Gharo）の3つの地域において、医療支援と物資支援を実施。医療支援については、救急救命士や医師が患者を診察し、下痢や咳、眼病等の治療に当たりました。3回の派遣で対応した患者の数は1,000人を超えます。また物資支援については、米、豆類、小麦粉、ティーバッグ、調理油などの食料品のほか、絆創膏や軟膏、抗生物質や衛生用品などが入った救急箱を配布し、受益者は合計で200世帯余りとなりました。

（AMDA本部 近持 雄一郎）

ハイチ 2021 年地震復興支援スポーツプロジェクト

2021 年 8 月にハイチを襲った大地震。その復興の一環として、AMDA はこれまで支援してきたボモン市（Beaumont）と合同で、子供たちを対象としたサッカー交流を行いました。昨年 8 月に行われたこの催しは、『ボモン市震災一周年記念スポーツプロジェクト』として 2 日間に渡って行われたものです。それぞれの被災地域から 3 チーム（総勢 45 人）の子供たちが参加しました。地震が発生した 8 月 14 日には、審判やスタッフを含む関係者全員で市内を行進。試合前には、犠牲者を追悼して五分間の黙とうが捧げられました。子どもたちからは、「震災で悲しい思いをしたが、今日は素晴らしい一日になった。他の地域でもこのイベントを開催してほしい」との感想が聞かれました。地震発生当初より、AMDA では、AMDA ハイチ支部が中心となり、医療および物資支援を実施。その後もボモン市長からの要請を受け、日本人調整員の派遣を含む計 4 回の支援を行っています。（AMDA 本部 近持 雄一郎）

ハイチ国内避難民キャンプ医療支援活動

2010 年の大地震以降、ハイチでは、長引く政情不安に加え、度重なる災害やギャング抗争等により、社会不安が深刻となっています。市民が安全を求めて国内の避難民キャンプに身を寄せる一方、海外の支援団体の多くは、治安の悪化に伴い、ハイチ国内での活動を見合わせています。

こうした状況の中、AMDA ハイチ支部は、昨年 12 月末から年明けにかけて、首都ポルトープランスにある避難民キャンプで医療支援活動を実施。デルマ地区（Delmas）のキャンプを 4 回に渡って訪問し、計 399 人を診察しました。また医薬品を提供したほか、子どもたちには食べ物や飲み物を配布。近隣に病院もなく、薬を買うお金もない中で、住民たちからは、「このような支援はあなた方が初めて」と喜ばれました。キャンプには浴室はおろかトイレすらなく、生活環境は劣悪を極めます。今回の医療活動について、住民たちからは、「毎月行ってほしい」という要望が聞かれました。（AMDA 本部 近持 雄一郎）

AMDA ハイチ支部が『第 12 回歯科プロジェクト』を実施

2023 年 3 月 4 日、AMDA ハイチ支部が毎年恒例の歯科プロジェクトを実施しました。会場となったのは、中部フォンデ・ネグレ（Fonds-des-Negres）にある救世軍の病院『Bethel Clinic』で、今回が 12 回目の開催となります。毎年、市内をはじめ、歯科医のいない周辺地域から患者が集まります。今年は訪れた人の数が 72 人と例年を上回り、歯科治療に加え、血圧測定や体温測定も行われました。「人生で初めて歯医者に来た」と語ったジャン・アントワンさん（45 歳）は、「自分の地元であるヴューブルダカン（Vieux Bourg d' Aquin）でもやってほしい」と述べました。アントワンさんに限らず、これまで一度も歯科を受診したことがないケースは珍しくありません。ハイチ支部のフレデリック支部長によれば、遠隔地には歯に問題を抱えた人が大勢おり、「このプロジェクトを全国で行ってほしいという声がある」ということです。（AMDA 本部 近持 雄一郎）

ウクライナ人道支援活動　報告会を開催

ウクライナで人道危機が発生してから 2023 年 2 月 24 日で 1 年。AMDA は同月 23 日にこれまでの活動を総括し、今後の活動予定をお知らせするため、報告会を開催しました。

当日は、AMDA 理事長の菅波茂に加え、ウクライナとの国境に近いハンガリーで活動した AMDA-TICO（『徳島で国際協力を考える会』）合同チームの吉田純医師、長谷奈苗（看護師・AMDA 職員）、難波妙（調整員・AMDA 理事）が登壇しました。またトルコ地震支援活動中の鈴記好博医師と菊池友枝看護師は、ハンガリーでの支援活動を振り返り、動画でメッセージを寄せました。

AMDA は 2023 年度もウクライナ西部および東部ハルキウで現地協力団体とともに医療支援、物資支援を継続して行います。報告会当日に各協力団体の関係者ならびに派遣者から寄せられたメッセージを抜粋して、以下に紹介します。

■ハンガリーおよびウクライナの現地協力団体関係者より：

「私はウクライナ出身です。現在ハンガリーで産婦人科医をしています。AMDA は、支援物資の提供のみならず、私たちと一緒に活動してくださいました。その後も継続的に支援していただいていることに感謝申し上げます」（ハンガリー・ヴァルダ伝統文化協会会長　エルデリイ・タチアナ医師）

「国境を越えてきたばかりの避難者を対象に医療支援を一緒に行ってきました。AMDA の協力なくして今回の支援はあり得ませんでした。現在、ウクライナ西部に救急車両で月 2、3 回赴き、医薬品や食料品、発電機等を届けています」（ハンガリー・メドスポット財団　アンドラシュ・シュパニック医師）

「今回の人道危機が発生した時、私が住んでいた地域でも戦闘が始まり、退避を余儀なくされました。その後、母、姉と息子の皆でこの施設に避難しました。清潔な住環境の下、必要な支援は全て受けることができました」（ウクライナ・セントミッシェル小児総合リハビリセンターが支援する避難者）

「2014 年にクリミア危機が発生した時、私は両親とルハンスクに住んでいました。幼稚園に行く際、爆発が起き、私はすごく泣きました。その後、ハルキウに移ることができました。生活は順調でした。それなのに、また、ハルキウに対する攻撃が始まりました。怖い毎日が続いています。ご支援をいただいた日本の皆さんと AMDA にお礼を言いたいです」（ウクライナ・ダイナスティメディカルセンターの支援下にある 13 歳の女の子）

■ 派遣者より：

「2022 年 3 月、ハンガリー・ベレグスラーニーのヘルプセンターで 24 時間の緊急医療対応に携わりました。1 年経っても状況がひどくなっていることを考えると、憤りというか、いら立ちを感じずにはいられません。絶対に武力を解決方法として使ってはいけないと改めて感じています」（吉田純医師）

「まだ戦争が続いている状態で、母国ウクライナに帰ることができない方、国内でも大変な生活を強いられている方がいまだに多くいらっしゃると思います。一日も早く戦争が終わることを願っています」（鈴記好博医師）

「日本に帰国後も、常に心では、ウクライナやハンガリーの人たちと一緒にいられたらいいなと思っています」（菊池友枝看護師）

※報告会当日の様子を QR コードから動画でご覧いただけます。

（AMDA 理事　難波　妙）

トルコ地震被災者緊急支援活動　中間報告

2023 年 2 月 6 日未明（現地時間）に発生したトルコ南部を震源とする地震に対し、AMDA は緊急支援活動を実施しました。2 月 11 日から 3 月 9 日まで医師 2 名、看護師 2 名、調整員 1 名を現地へと派遣し、トルコ人協力者とともに活動しました。

2 月 13 日、AMDA チーム一行は、初期活動において支援を受けた日本医師会の紹介により、トルコ医師会を訪問。同医師会の会長と面会し、義援金とともに、日本医師会会長の松本吉郎氏から託された見舞状を手渡しました。翌 14 日には被災地の医療活動を担うアダナ医師会を訪問し、被害状況について訊きました。その後、トルコ南部でニーズ調査を行い、19 日より甚大な被害を受けたアドゥヤマン県を中心に支援活動を開始しました。

現地では、主に物資支援と被災者の健康チェックを行いました。物資支援では、被災者が何を必要としているか聞き取りを行った上で、現地で物資を調達しました。また気温が零度を下回る中での避難であったため、冬靴や発熱性の肌着等を配布しました。

イスラム圏のトルコでは、女性はヒジャブと呼ばれるスカーフで頭を覆う習慣があります。避難生活が続く中、女性たちのスカーフが汚れていたため、これらを新たに手配しました。このほか、子どもたちへは、現地で調達したお菓子を配布。加えて、日本の学生インターンがラッピングした折り紙や髪飾り等を手渡しました。

2 月 16 日、17 日には、ニーズ調査中に立ち寄った山間部のアクス村（Aksu）で、被災者の健康チェックを実施しました。その後、19 日より、アドゥヤマン県内で地元の医師たちが行っている巡回診療に同行。被害の大きかったオルクル村（Oluklu）およびアハメトチャ村（Ahmethoca）では、避難者の健康相談と怪我人の対応に当たりました。倒壊寸前の家に持病の薬を置いてきたという避難者には、現地医師より薬が処方されました。

支援活動に参加した AMDA の医師は、「災害時は普段よりも精神的ストレスが強く、持病が悪化しやすい環境にある。悪化する前に健康チェックを行い、不安を取り除くとともに適切なアドバイスを行うことが重要である」と語りました。

今後は、現地の団体と協力しながら、被災地で必要とされる支援を行っていく予定です。

（プロジェクトオフィサー・看護師　長谷　奈苗）

台湾 IHA および AMDA 台湾支部とミーティングを実施

台湾保健省にて

AMDA は、これまで台湾の数多くの団体とともに、様々な医療支援活動を台湾の内外で行ってきました。今回は、元台湾医師会会長の呉運東先生のご教示の下、台湾保健省の国際活動部門である『台湾 IHA』（Taiwan International Health Action）を 3 年ぶりに訪問しました。今回のミーティングにて台湾 IHA は、AMDA との共同事業の実績を活かし、保健衛生分野での事業展開を継続することに同意。その一環として、ネパールにある AMDA ダマック病院の内視鏡技術移転事業に関し、再度協力を検討していただけるとの回答を得ました。

このほか、AMDA 台湾支部とのミーティングでは、多発する自然災害に対応した『AMDA 世界災害医療プラットフォーム：アジア・大洋州版』に協力するため、AMDA 台湾支部が独自で、災害医療を中心とした医師による団体の立ち上げを目指すことになりました。　（AMDA 理事　難波　妙）

■ご協力ありがとうございました。

2022 年 12 月～ 2023 年 2 月分（敬称略）

■ 総社市防災訓練にパネル展示で参加

2023 年 2 月 5 日（日）、総社市立阿曽（あぞ）小学校にて、地域防災力を高めることを目的に、地震を想定した防災訓練が行われました。阿曽小学校区の住民およそ 300 人が 7 種類の体験型訓練に参加し、訓練終了後は、参加者全員に修了証が贈られました。今回、AMDA は過去の災害支援活動に関するパネル展示での参加となりました。

～災害支援活動パネル展示～

・阪神淡路大震災　・東日本大震災　・熊本地震
・西日本豪雨　・その他災害支援
・海外支援（ウクライナ人道支援など）

（AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム合同対策本部　本部長　大西　彰）

■ 明治安田生命保険相互会社岡山支社よりボランティア活動に参加

2 月 10 日、社会貢献の一環として、昨年に続き、明治安田生命保険相互会社の社員の方 2 名が AMDA でボランティア活動をしてくださいました。今回、トルコ地震緊急医療支援活動に出発する派遣者の準備に立ち会い、またウクライナ人道支援活動に関して、書類作成の補助をしていただきました。『まちかどトーク（街頭募金）』では、イオンモール岡山地下通路にて積極的にチラシを配布して募金を呼びかけてくださいました。

～ボランティアに参加した社員の方より～

「医療チームが現地に派遣される直前の貴重な様子を見ることができ、現地の方が求めていること、そして自分たちに何ができるかを知る必要があるからこそ、現地へ行くことが重要なのだと感じました。街頭募金では多くの方が協力してくださいました。その思いを繋げる活動ができ、今回参加してよかったと心から思いました」

（AMDA 理事　財務会計　難波　比加理）

東日本大震災から 12 年 ～ AMDA 大槌健康サポートセンターの再建と現状

元のユニットを移転し、リフォームした
AMDA 大槌健康サポートセンター

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災から 12 年の月日が流れ、辛いこと、苦しいことも沢山ありましたが、これまでやってこれましたのは、皆さまの心温まる励ましの言葉とご支援のお陰です。本当にありがとうございました。

昨年 12 月はじめに町民の皆さまが集える場所ができたことで、更に各教室の事業が活気付いてきました。今まで道具の運搬、準備等大変なことが多々ありましたが、その場に備えてあると、作業が開始しやすくなりました。3 年くらい郷土（節句）料理教室ができなかったのですが、「そろそろ再開したい」という皆さまの要望が出てきましたので、再開しようと企画しています。

何かに夢中に取り組んでいると、皆さまからヒントをいただき、話が弾み、笑い声や笑顔が溢れる空間が広がります。技術的な物や、物づくりだけでなく、人づくり、縁づくりの大切な場になっているなと、最近感じています。 一人ひとりが繋がって自分が学んだもの、得たものを、自分自身の周りの大切な方々にお伝えする「恩返し」から「恩送り」の場になっていると思います。

一歩ずつと思ってやってきましたが、半歩ずつの時もありました。振り返ってみたら 12 年。今回、建物の外壁の板を修繕しながら、ご支援くださった皆さまの心温かい思いを込めて、釘を打ち、ペンキの色を塗り重ねました。AMDA 大槌健康サポートセンターの教室に来てくださる生徒さんたちのご協力により、建物を再建することができました。

（AMDA 大槌健康サポートセンター長　鍼灸師　佐々木　賀奈子）

～学生最後の国際協力～　（学生インターンからの報告）

私は就職するまでの 2 か月、地元岡山から国際協力がしたいと思い、AMDA で活動しました。昨年の夏にポーランドでウクライナ支援活動を行った際、自身の未熟さと現状を変えられない不甲斐なさを痛感しました。それでも、「私の行動や思いが何らかの形で世の中のためになれば」、そして、「生まれ育った岡山の力になりたい」と考えました。

AMDA では、ハイチの歯科プロジェクトに携わり、メールでの交渉、ウクライナ・トルコ活動報告会の補助、ウクライナからの動画の和訳のほか、トルコの子供たちへのプレゼントを作りました。短期間でしたが、普段関われないような方々やスタッフの皆さんと出会い、現地の実情と、各人の活動への想いと人生の歩み方を学びました。今後はこの経験を糧に自身の人生に活かし、岡山や世界のために寄与していきたいです。（インターン　片山　菜那）

令和 4 年度岡山県 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事（岡山県教育委員会主催）

文部科学省の採択事業として、岡山県教育委員会は、「未来の岡山と世界の Well-being の実現に貢献するグローバル・リーダーの育成」を目的とした『WWL コンソーシアム構築支援事業』を実施しています。

2 年目となる今年 2 月 11 日、AMDA の理事を務める佐藤拓史医師と難波妙が、これまでの人道支援活動の経験を通じて、それぞれの視点から「”Well-being” とは？」というテーマに迫りました。当日は、拠点校および連携校の生徒と教職員約 50 名が参加しました。

～参加した生徒の感想～

「” どんなに過酷なことがあっても、楽しいと思えることが根底にある ” という佐藤先生の言葉を聞いた。今、進路で悩んでいるけれど、本当に心から楽しいと思える仕事を選ぶことが大切なのだと感じた」

（AMDA 理事　難波　妙）